本を選ぶ

NO.399 2018年(平成30年)8月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

http://www.las2005.com

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぽわん>スマホ世代の大学教育
●司書の眼 第３３回
●図書館を離れて（第４０回）
●おとなと絵本のしあわせな時間
●鳥の目 ６９

ろん・ぽわん

スマホ世代の大学教育

大学の授業で学生に発表させたり、レポートを書かせたりするときに、必ず指示することがある。第１に、必ず事典類で確認をしてから発表を行うこと。紙の事典だけでなく、特に大学図書館で契約しているジャパンナレッジＬｉｂや各種データベースについては必ず有効活用するよう、１年生の段階から指導を行う。使い方さえ覚えてしまえば基礎的な調査が簡単にできるようになるので、この点については早くに定着する学生が多い。

第２に、一方で自分の知りたい情報について、あえて「ググって」みること。実はこれが、今の大学生にとっては案外難しいことのようだ。SNSやゲームが目的でアプリを使ってインターネットにアクセスするものの、それ以外の情報検索をした経験が少ないのである。また、たとえばAND検索を使うときでも、どういうキーワードを入れれば自分のほしい情報を探し出せるのかについては、前提となる知識が不可欠となる。

こうした「ググる」作業をやらせるのは、インターネット上に無数にあふれている情報が、必ずしも事実を伝えているわけではないことを実感させるためでもある。ウィキペディアの情報やブログ等に書かれている情報と、事典類に書かれた情報の齟齬。それらをただ「間違い」として片付けるのではなく、学生がより多くの情報に当たってみるきっかけになるように利用したい。

一方でいちばん苦労しているのが、CiNiiによる論文検索である。これを教えてしまうと、PDFにデータ化された論文だけを参考文献に挙げてくる学生が大量に出て、なかなか紙媒体の資料に当たってくれなくなる。実際にはまだデータ化されていない論文の中に読んでほしいものがいくつもあるのだが、今の学生は図書館に紙媒体を探しに行くという発想がないので、なかなか辿り着かない。この点をどう改善していくかは、おそらくどの大学でも共通の課題だと思われる。

そこで今年から、「大学図書館でレファレンスサービスを使ってみること」を課題として出すようにしている。そのことで、紙媒体でしか手に入らない論文になんとか辿り着いてほしい。

このように現在の大学生は、無数の情報に簡単にアクセスできるようになった一方で、意外に情報を活用できていない。そのため大学教育では、単に知識を与えたり、教員の考えを伝えたりするのではなく、どうやって調べたら自分自身で学修できるのか、より多様な立場に立った意見に出会うためにはどうしたら良いのか、その方法自体を教えていくことが重要だと考えている。このとき、できる限り大学図書館の司書の方と大学教員とで連携をとって、学生がより効果的に学修できるようにすることが、今の大学教育にとって最も重要なことの一つなのである。（大橋 崇行）

司書の眼 第３３回
－自分のことを知る－

鷹野 祐子

あの日

この夏、オウム事件の元死刑囚たちの刑が執行され、一つの区切りとなった。地下鉄サリン事件のあの日、神奈川のはずれの研究所に勤めていた私に、「東京のほうで大変なことが起きているよ」と上司が言って、テレビを見せてくれた。ちょうど年度末の学会業務で都会に行く用事があったその上司は、急遽会議を欠席とした。現場に近い都会にいた人たちはどんなことを思っただろう。千代田線、丸ノ内線、日比谷線の他の電車に乗っていた人、いつもはその路線だが、たまたま休みだった人。御茶ノ水、四ツ谷、恵比寿、秋葉原、小伝馬町。サリンの液体を乗せたまま走った電車が通った霞ケ関、築地、八丁堀、神谷町、新高円寺、人形町、茅場町、国会議事堂前、本郷三丁目、荻窪、中野坂上、中野富士見町。東京区内で暮らしたり仕事をしたりする人だったら誰もが被害者になる可能性があった。

政府の対応はいち早く、同じような化学兵器製造をさせないために、サリン等の特定物質に関わる規制が２か月後に、２年後の化学兵器禁止条約発効に合わせて、その他の化学兵器禁止条約上の申告等手続き義務に対応するための規定が施行された。そのあたりから、化学物質管理が厳しくなってきたので、覚えている方も多いかもしれない。それまでじゃぶじゃぶ使っていたような有機溶剤もキチンと出入を管理され施錠管理される薬品も増えた。

土屋元死刑囚は、サリンの製法を調べるため、国会図書館や大学の図書館で専門書を調べたという。いわゆるエリート信者と言われる医師、獣医師、物理学・化学・分子生物学者と、かつては医学図書館の周辺にいた学生たちばかり。大手企業に内定していた人や、国際学会誌で注目されていた学者・研修医など、図書館に頻繁に出入りをして活用していただろう。危うい橋を渡ってしまった利用者に図書館は何ができたであろう。何をしてきたであろう。あれから 25 年たって、２学期を前に「学校にいきたくない」子どもたちに「学校に行きたくなかったら図書館においで」とつぶやく図書館もでてきた。でも図書館側の姿勢は本当に変わってきているであろうか。心のバランスを崩しかけた人に何かをしているだろうか？　利用者個人から直接要求されないサービスを、こちらから上手に提案して、提供できているのであろうか。

情報提供の今

そういえば、図書館海援隊というのがあったなあ、と思い出した。平成 22 年、有志の図書館が「図書館海援隊」を結成し、ハローワーク等関係部局と連携した貧困・困窮者支援をはじめ具体的な地域の課題解決に資する取組をより本格的に開始した（文科省 HP「図書館海援隊」の活動について http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kaientai/1300123.htm）。もう８年も活動されているんですね。私のアンテナには最近引っかかってこないけれど、Google 検索をすると、2017 年に熊本で災害援助に関する図書館の課題解決支援サービスの在り方についてフォーラムが開かれていた。ビジネスに関する支援というのは、かなり定着した感がある。ビジネスのスタートアップ支援と、営利行為への寄与ということろが今後どうなっていくのか。ビジネス支援の場合、利用者から要望されない、ということはないだろうから、支援しやすいのかもしれない。

一方、健康情報はどうだろう。病院で診断されて病名がわかったけれど今後の治療方法について情報が欲しい、とか家族が病気で、という人には、健康情報サービスコーナーはありがたいものだ。医中誌 WEB なみに病名の件名がついてない図書館 OPAC で検索しても、ぴったりの書籍は見つけられない。コーナー展示で現物をいろいろ見ているうちに、なんとなく得られる周辺情報もあるだろう。だけれども、病名がつく前の段階だったらどうだ

ろう。相談しようにもカウンターにいるのはカウンセラーではないので、「もうちょっと具体的に教えていただけますか？」などど回答されるだろうと、どうにか自分で探そうとするが、目につくのはＮＤＣの１類哲学あたりの古典哲学、心理学・精神分析、仏教・その他の宗教などなど。発達障害を見れば、子育て・教育関連の棚になり、ちょっと違う感があふれるし、神経科学．精神医学の493.7あたりの本で新しい本を見つけるのも難しい。そういえば、ＮＤＣ10版では、146.8、145.7の精神療法、異常心理学が細分化され、493.7でも神経系疾患と精神障害が混在していたのが整理された。

自分のこころを知る

研究所の精神科医が新書を紹介してくれた。「こころの病に挑んだ知の巨人」（ちくま新書、2018）。日本の精神医療の５大セラピスト、森田療法の森田正馬、「「甘え」の構造」の土居健郎、箱庭療法の河合隼雄、「時間と自己」の木村敏、絵画構成法の中井久夫。この辺の素地がある方には、黎明期の日本の精神医学の総まとめとしておすすめである。フロイト、ユング、アドラー、ロジャース、ラカンなど西洋精神医学を学び、日本人のための治療実践をしてきた５人。日本の精神医学の父・呉秀三、戦争、全共闘運動、DSM－IIIの登場など、医学図書館ならなじみのある単語が歴史的に、系統的につながっていくだろう。

この本がちょっと難しく感じるならば、最相葉月の「セラピスト」（新潮社、2014）をおすすめする。「絶対音感」（1998）でノンフィクション大賞、「星新一 一〇〇一話をつくった人」（2007）で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞、日本ＳＦ大賞などをとった最相葉月氏が、河合隼雄の箱庭療法、中井久夫の絵画構成法を著者自身が体験しつつ、精神医学療法の日本への導入をわかりやすく伝えてくれている。

「あなたもこの世界を取材なさるなら、自分のことを知らなきゃならないわね」

著者が河合隼雄とスイスの心理療法家ドラ・カルフに箱庭療法を師事した木村晴子に言われた言葉である。著者はその結果、この本を執筆していくうえで自身の病名も知ることになる。自分のこころを知るためには、心療内科に初めて行ってから20年の月日とこの本の執筆が必要であったと著者は語っている。

Do The Hokey Pokey

前回の記事で、小１の娘が教室にいられない子であったと書いた。入学式初日から必ず誰かが見張りにつく、というような日々であった。校長もでてきて市の教育巡回相談にいち早く連絡がいき、通学の付き添い、面談、発達検査、特性の見極めと、この１学期はめまぐるしく過ぎていった。２学期からのサポートを手厚くするために、就学支援シートを書くようにいわれた。これがあると予算がつくらしい。自治体の支援というものは、市民が自ら要求して初めて提供される。それは、介護でも教育でも福祉でも同じである。

最近の若者は、夢を見ないそうだ。夢といっても、将来の夢ではなく、眠っているときの夢。成長してく間に実体験が少なく、夢に見るほどイメージ力が育っていないそうだ。そこで、困っていることがわからないと、困っていることがいえない。なんだかもやもやする、と言っている間に大事件を起こしたりする。これまでの精神療法のアプローチでは対応できず、パーソナルな対応が必要なのだそうだ。

図書館が課題解決型サービスに乗り出してから、約10年。図書館のサービスは、公民館サービスに限りなく近づいている、と言う人がいた。複合施設の一部としての図書館というのももう珍しいものではない。そんな中で、図書館でのサービスはどのくらい利用者の要求に沿っているか？　図書館サービスする人は、利用者として地元の図書館についてどのくらい知っていて、どのくらい利用したことがあるであろうか。

この世界で生きるなら、まずは自分のことを知らなきゃならない。

（たかの　ゆうこ：医学系研究所図書室）

おとなと絵本のしあわせな時間

井上 由美子

絵本は、まだスラスラ文字が読めない子どものための本。だから私は、文字だけの本が読めるようになったら、絵本は卒業するものだと勝手に思いこんでいました。保育園時代、福音館の『こどものとも』が配られるのを毎月楽しみにしていたのに、小学校に入学したら定期的に絵本が貰えなくなってしまったことも、そんな勘違いに繋がっていたのかも知れません。

遠い記憶を紐解いてみると、小学２年生の夏休みにポプラ社子どもの伝記全集『ベートーベン』を読み、習い始めて３年のピアノの経験を照らしあわせて読書感想文を仕上げ、先生に褒めてもらえたことは今でもはっきりと覚えていますし、私の読書の原点のような気もします。

その翌年、通っていた小学校が読書研究指定校となり教室には学級文庫が設置され朝の 10 分間読書が始まりました。友達と競い合うように次々と児童書を読み漁り、学級文庫の本をすべて読み終えると、次は学校の図書室、そして市の図書館へと興味がわきました。市の図書館へは、子ども達だけでは行けなかったので、友達のお母さんが引率してくれました。小学校の校庭に移動図書館カーが来てくれたこともワクワク・ドキドキした記憶のひとつです。

あれから長い年月を経た現在の私のワクワク・ドキドキは『おとなの絵本プロジェクト』によってもたらされています。

2014 年８月、プロジェクトの主宰であるドンハマ★さんが Facebook でこんな発信をしました。『大人がお酒を飲みながら絵本を楽しめるイベントが出来たらいいな。一緒にやる人この指とまれ～！』この呼びかけに、私を含め 15 人程が反応し企画会議を開催。ここで６人の有志が運営メンバーとなり、それぞれ得意なことを少しずつ役割分担して、2014 年 11 月５日、おとなの絵本プロジェクトのメイン企画となる『よみきかせナイト』が産声をあげました。

大人×絵本×食事（アルコール有）で過ごす『よみきかせナイト』は、参加者の中から読み手を募って、大人同士で読み聞かせを楽しむイベントです。絵本を通じて、大人が自分らしくワクワクしたり、ほっこり出来る時間を提供することから、お子様のご入場を一切お断りしています。これは、読み聞かせに集中するための拘りです。また、食事や小土産もワクワクのひとつにして頂けるよう毎回工夫を凝らしています。

プロジェクトの情報発信は Facebook のみですが、集客を始めると毎回あっという間に満席を頂き、絵本好きの輪はどんどん広がって行きました。最初は２カ月に１度くらいのペースを考えていましたが、あれよあれよと言う間に多くの方たちが興味を持って下さり、気がつけば毎月開催となりその勢いは地方へと広がりました。現在、札幌・名古屋・滋賀・大阪でも定期的に開催。各地に運営メンバーのグループが出来、それぞれの個性を発揮しながら『よみきかせナイト』を楽しんでいます。

また現在では、出張企画としてドンハマ★さんが全国各地に読み聞かせに出向いたり、絵本をモチーフに使って『哲学』したり。私も不定期ながら『語り ba 絵本＆児童文学』という勉強会を開催し様々な切り口で絵本を楽しむようになりました。

さらに今夏は東京ドーム天然温泉 Spa LaQua のデトックス企画で、おとなの絵本プロジェクト推薦絵本を 30 冊選書し展示して頂く機会に恵まれました。

約 20 年前、絵本作家を目指していた友人から「絵本は映画と同じ総合芸術なんだよ」という一言を聞きました。当時はピント来なかった私ですが、偶然にもおとなの絵本プロジェクトで出逢った方から全く同じ言葉を聞いた時、絵本の無限の可能性を改めて感じました。

絵本は総合芸術。これに気付いた大人がいま続々と増えています。仕掛ける側も仕掛けられる側も共に楽しめる『絵本版カラオケ大会』のような『よみきかせナイト』で、これからも大人と絵本のしあわせな時間を紡いで行きたいと思っています。

（いのうえ ゆみこ:おとなの絵本プロジェクト）

図書館を離れて（第４０回）
―戦場で本を読む―

並木 せつ子

一昨年の夏、『戦地の図書館；海を越えた一億四千万冊』（マリー・グプティル・マニング著　東京創元社）を読み、第２次世界大戦中のアメリカで、戦地の兵士に本を送る活動があったことを、私は初めて知った。「戦勝図書運動」と、その後の戦時図書審議会による「兵隊文庫」である。

戦勝図書運動は、1941 年ＡＬＡ（アメリカ図書館協会）が中心になって、全国の図書館員が兵士に本を送るため、市民に本の寄付を呼びかけたことに始まった。正式にこの名称になったのは、アメリカ参戦後の 1942 年１月、ルーズベルト大統領の後押しを得ていた。大統領は＜書籍は民主主義の象徴であり、思想戦における武器だと心から信じていた＞という。

1942 年５月までには目標の１千万冊を集めたものの、1943 年になると市民からの寄付は激減し、実際には役に立たない本もあったため、この運動は 1943 年に終了した。その後に登場したのが戦時図書審議会の発行した兵隊文庫である。少ない軍の予算のもと＜物資の供給が制限された状況下で大量生産するために新しい形態の本を作る、という困難な仕事＞の末できあがったペーパーバックの本は、戦地でも読めるよう読みやすさが重視され、軍服の胸ポケットとズボンのポケットに入る大きさだった。

戦時図書審議会とは出版業界の人々を中心に、戦争に勝つために＜書籍をどう役立てるかを検討することを目的とした組織＞である。1942 年３月に設置が決定し、スローガンとして＜本こそが思想戦の武器だ＞が採用された。審議会のいくつかのプロジェクトのうちの一つが兵隊文庫プロジェクトで、毎月 30 点を選び各 5 千冊ずつ発行した（後に増減あり）。最初の兵隊文庫 150 万冊が陸海軍兵士に届けられたのは 1943 年９月で、終戦後の 1947 年６月まで続いた。

兵隊文庫に選ばれた本は『ジェーン・エア』『炎の人ゴッホ』『吸血鬼ドラキュラ』『大草原物語』『ネズミ・シラミ・文明』『ブルックリン物語』『数学は世界を変える』『災厄の町』『ハーバード大学殺人事件』『サモアの思春期』『ウォールデン森の生活』など。ミステリやＳＦも多く多彩な分野に及んでいる。個人的にはウィラ・ギャザーの『死を迎える大司教』が入っていたことに“新鮮な驚き”があった。

最終的に、兵隊文庫は１億２千３百万冊が海を越え戦地に送られた。先の戦勝図書運動で送られた千８百万冊と合わせると１億４千万冊になり、ヒトラーによって発禁・焚書にされた１億冊を超えた。これが『戦地の図書館』に書かれた、戦地の兵士に本を送る活動の概要である。

読後の関心は「日本ではどうだったのか」というところへ向かった。戦前・戦中の図書館については、本の閲覧禁止、蔵書の没収、利用者の思想調査など「図書館の自由」が損なわれたという、ほんの上辺しか知らなかったが、既にこういうことを研究されている先達もいて、いくつかの資料にたどりついた。そして、日本でも戦地の兵士に本を送る活動があった、ということを初めて知ったのである。

この活動は、アメリカのＡＬＡと同じように、本や雑誌の寄贈を市民に呼びかけ戦地に送るというものだった。満州事変（1931 年）、日中戦争（1937 年）、太平洋戦争（1941 年）、そのつど日本図書館協会は『図書館雑誌』で図書等の寄付を呼びかけている。満州事変のときは図書１万 75 冊、雑誌３万 6689 冊、寄付金 171 円 15 銭。日中戦争のときは図書計 2042 冊、雑誌計２万 6847 冊、太平洋戦争のときは図書・雑誌計 141 点、購入資金 353 円 5 銭が寄せられた。人口が違うとはいえアメリカとの数字の差は大きい。

村上美代治は＜（日本の図書館の）活動の裾野は全国民を対象とした活動にはなりえなかった。・・・（アメリカの図書館は）組織的、体系的に活動をしたことが日米の大きな活動の違いとなって現れたのであろう＞と『図書館雑誌』に書いている。日本でも、図書館による図書・雑誌の募集はしりすぼまりになり 1943 年に終了した。（なみき せつこ：元図書館員）

※参考資料は次回掲載

鳥の目 69

―「渡り鳥が減っている」気づかぬうちに―

為貞 貞人

埼玉県生態系保護協会の月刊誌『ナチュラルアイ』2018年5月号が、「渡り鳥が減っている」と題した特集を組んでいます。

季節によって北から南へ、南から北へと移動する渡り鳥。春にはツバメが東南アジアから飛来し、子育てを終えて秋に越冬のため東南アジアへ戻ります。秋が深まるとロシアなど北の国からハクチョウやカモたちが、越冬のため若鳥を連れて大挙日本各地の湖沼や河川に飛来します。春と秋にはシギやチドリの仲間が、シベリアなどの繁殖地と東南アジアやオーストラリアの越冬地を往復する途中、休息のため日本列島に立ち寄ります。

繁殖地と越冬地を行き来する渡り鳥は、その途中いくつかの中継地が必要です。その一つでも消失、破損すれば渡りが絶たれます。渡り鳥の移動コースは様々で、森、湿地、河川、湖沼、干潟などの自然環境のほか、水田、畑、公園など人間の生活に近い環境を利用している鳥もいます。私たちが知る野鳥の約7割が渡り鳥ですが、この渡り鳥がいま気づかぬうちに減っているのです。

北の中継地ーサハリン島

現在の厳しい地球環境の中で渡り鳥が生き残るためには、生息地や中継地の保全が私たち人間に託されています。最近私は、日本に飛来するハクチョウ、ガン・カモ、シギ・チドリなど冬鳥の主要なコースの一つであるサハリン島（樺太）に関心を持ち、ロシア科学アカデミー生物学・土壌科学研究所極東部門サハリン生態学班の調査報告『北サハリンの水辺の鳥』(I.M.Tiunov, A.Yu.Blokhin. Waterbirds of North Sakhalin. Vladivostok Dalnauka 2011. A4判344頁 露文)を読んでいます。

本書は1988－2010年の多年にわたり、北サハリンの東西の沿岸の海、湾、河川、湖沼などで行われたガン・カモ、ハクチョウ、シギ・チドリなど120種の水辺の鳥の調査結果と先行の多くの調査データに基づき、鳥の種類、移動・渡り、中継地、生息・繁殖などの実態と変化（種の個体数と割合、渡りの期日と方向、群れの集合場所と集中度、営巣･産卵･ふ化数など）と障害要因について、特有の地理的環境や気象条件と関連して詳細に報告しています。併せて498点にのぼる鳥の生態や生息地の多彩な写真や地図・グラフを掲載し、北の渡り鳥の一大中継・生息地の状況をリアルに伝えています。

北サハリンは島を巡る長い沿岸が、細長い州や岬で形成されたザリフと呼ばれる多数の湾や潟からなり、その浅瀬や湿地が多くの水鳥を引き寄せます。

日本に飛来するオオハクチョウやコハクチョウの多くは､秋にはオホーツク海やタタール海峡（間宮海峡）を越え、サハリン島のこれらのザリフや湖沼で休息し、宗谷海峡を渡ります。春はその逆です。　ハクチョウだけでも北サハリンの総数は春の渡りが25,000－35,000羽（2007－2008年)、秋の渡りが70,000－80,000羽（2008－2010年）と見積もられ、北サハリンはハクチョウを含め多くの日本の渡り鳥の重要な中継地であり、また繁殖地でもあります。

2009年5月24日に北サハリンのオホーツク海沿岸のアストフ湾の上を飛ぶ26羽のオオハクチョウの写真（『北サハリンの水辺の鳥』図77）の先頭部の2羽に、日本で付けられた調査用の緑色の首輪がルーペではっきり確認でき、うれしくなりました。

渡りのネットワーク

渡り鳥を守るには、まず繁殖地、中継地、越冬地の生息環境の解明が欠かせません。こうしたとき、日本の研究者から「世界中のいたるところで環境破壊が進み、生物種の急速な減少が懸念される今日、渡り鳥とその生息環境の保護を目指した応用研究の重要性が増している」という立場から、コウノトリ保護のための貴重な研究成果が発表されています。(『鳥の自然史』樋口広芳・黒沢令子

編著　北海道大学出版会　2009年「第12章　衛星追跡と渡り経路選択の解明」島崎彦人、山口典之、樋口広芳)。

日本列島で繁殖する野生のコウノトリの絶滅以後、その人工繁殖、野生復帰の努力が続いていますが、もともとコウノトリは東アジアで繁殖、移動する渡り鳥です。繁殖場所は、ロシア極東のアムール川中流域およびウスリー川流域で、冬は群れで中国南部へ渡り、揚子江中下流域で越冬します。野生の個体数は約2,500羽と推定され、国際自然保護連合のレッドリストで絶滅危惧種に指定されています。

しかし、越冬地までの中継地など渡りの様式については断片的にしか分かっておらず、コウノトリの保護には、繁殖地と越冬地をむすぶ経路や中継地の解明が急がれていました。上記論文の研究者たちは、1998 - 2000年にアムール川およびウスリー川の中流域の湿地帯で、巣立ちが近い13羽の若いコウノトリに送信機を装着し、うち9羽の越冬地までの渡りの全経路を人工衛星で追跡することに成功しました。これにより、これまで漠然としていたコウノトリの渡りの経路が具体的に明らかになり、データ分析により繁殖地、中継地および越冬地の正確な位置情報が得られました。また、それぞれの個体についても、利用する中継地の数、滞在日数、中継地に立ち寄らずに移動する距離など渡りの様式に関する重要な情報が抽出されました。

衛星追跡で明らかになった情報で特に注目されたのが、中継地のほとんどが人口増加と経済発展が著しい地域だということでした。研究グループは繁殖地、中継地、越冬地の連結を図示した「生息地ネットワーク」を作成し、渡りの経路の連結性を維持する上で優先的に保存すべき「重要中継地」として中国東部の渤海湾北岸の中継地を特定しました。それはもしここが開発・汚染で利用不可能になれば繁殖地と越冬地を結ぶ渡りの経路が断たれ、揚子江流域の越冬地が孤立することを意味します。

これら調査からかなりの年月が経ちますが、これまでアジア各国の渡り鳥の保護区の整備は、繁殖地と越冬地に集中しており、現在中継地を含む生息地全体の連結性を考慮した保全が求められています。欧州や北米では各国の連携で大陸規模の保護区ネットワークが進んでいます。アジアでも渡りのネットワークの解明がさらに広がり、渡り鳥が求める湿地や干潟の保全と再生について国境を超えた連携とプロジェクトの進展が望まれます。

（ためさだ　さだと：さいたま市図書館友の会）